

食卓が

勉強机



吉村 幸代

長野県防災会議の委員を務めている。同会議は自衛隊・警察、消防、交通・報道・医療などの公共機関、学識経験者といった、あらゆる分野の代表者によ

って構成されており、会長は県知事。私は一県民として委嘱を受けた。併せて原子力災害対策部会のメンバーにも名を連ね、時折、長野県庁へ出向いている。

雪の季節が近い。先週は、2月の大雪災害を受けて長野県地域防災計画を修正するとのことで招集があった。長野県は、災害・防災情報専用のツイッターを始めたそう。都道府県レベルでは初めてとのこと、期待が持てる。

今年は自然災害の多い年であった。県内だけでも豪雪に始まり、豪雨と土石流災害、大噴火、地震。白く覆われた御嶽山頂の画像に行方不明者を想い、胸塞がれる。

どこか、自然界のバランスが崩れ始めていると感じる。何か、地球の秘めたエネルギーが噴出してのような印象も受ける。気象の専門家が、「常識が通用しない時代」と説明していた。

本紙の記者氏が、紅葉の御嶽山を取材中に噴火に遭遇したことを振り返り、「あの時、三ノ池へ向かわず山頂を目指してい

れば」と書いていた。よく分かる。心に負った傷が、「もしも」を呼び起こす。

東日本大震災の当日、私は家族とともに岩手県にいた。「あの日、当初の予定どおり三陸海岸へ出かけていたら」と思うと、今もって胸がときどき始める。なおかつ被災体験を経て、私は不思議な感覚に包まれているようにもなった。自分は生きている。それ以上に、「生かされている」という気がしてならないのだ。

平成23年、被災地から脱出するかのようにして信州に帰った私は、寿台公民館長として連続講座「シリーズ我が町の防災を考える」を立ち上げた。公民館事業も地域活動も、究極的には全てが防災に行き着くという実感を抱いて、現在も折に触れて講演を引き受けている。生かされている自分が語ること、役に立てるならと願いつつ。

これだけ自然災害が続いているということは、他人事と高を括ってはいけないうことだ。体験がないと理解はなかなか深まりにくい上に、喉元過ぎれば熱さを忘れがち。想像する力、忘れない努力が求められる。

今年もあと1カ月余りとなった。年末が近づくと、「去年と同じ今年の幸せ」という言葉を思い浮かべる。いつもどおりの日々が続く幸福を噛み締め、平穏を祈りながら、大掃除のついでに防災備品の点検をするように。

(よしむら・さちよ、前寿台公民館長、主婦・松本市)

去年と同じ今年の幸せ